

色

電子制御工学科 2年 富原 優希

主人公の愛は、小学校の頃からいじめられていました。中学生になり、まわりは恋の話で盛り上がったりするが自分には恋など無縁のものだと思っていました。

私は小学校の頃からいじめがあるのかとびっくりしました。また、中学生になって新しい学校での新しい生活、なにかもが新しくなるのに、いじめの連鎖はいつまでたっても続いているんだと思うと悲しくなります。小・中といじめというものが身近になかったので愛の気持ちは想像することしかできません。

愛は次第に学校に行かなくなりました。担任は愛にボランティアに参加してみるように勧めました。ボランティア先は福祉施設で、目の不自由な明に出会いました。まず最初に明の自宅から駅までの道のりを教えました。どこに段差があってどこに交差点がある・・・教えながら「自分達には、こんなあたり前のことが明には大変なことなんだ。」と愛は思いました。

学校に行っているだけでは、あまり触れ合うことのなかった目の不自由な明との出会いが愛にいろいろなことを考え感じさせていると思いました。高校に居場所を見つけられなくてもこういったボランティアを通して社会で居場所を見つけられればいいと思います。

私も中学三年生の時に授業の一環で福祉施設で一週間過ごしたことがあります。そこでは、目の不自由な人、耳の不自由な人、たくさんの人が支えあって生活していました。みんなその日その日与えられた仕事を一生懸命こなしていました。

私は、それを手伝いながら思ったことは、彼らはとにかくたくさん話しかけてくれます。そして与えられた仕事を一生懸命こなします。それはただ「がんばってる」という言葉では表現できない思いを感じました。そこでは、目の不自由な人は見えないなりに、指の不自由な人は動かないなりに、たくさんの人の一生懸命を感じた一週間でした。

ある日、二人で昼食を食べているときに愛がトマトの色を見ていいました。「そのトマトおいしそうな色をしているね。」愛は、はっとしました。生まれつき目の見えない明には、トマトの赤も空の青も違いが分からないのです。愛は明に色を教えたいと思いました。

愛が明に何気なく言った一言。もし、その相手が目の不自由な明じゃなかったら、それは自然に交わされて特になんでもない言葉なのかも知れません。

私が愛の立場ならどうやって明に色を教えただろうか。私は目が見えます。トマトの赤も、空の青も、さまざまな色と生活しています。私に色のない生活が想像できないのと同じように明には色のある生活が想像できない、そう考えると相手が想像できない色を教えるのは大変なことだと思います。

愛は色そのものを教えるのではなく、人がその色に感じる気持ちを明に教えようと思いました。トマトの赤は怒ったり興奮する感じ、空の青は優しい気持ち、そうやって明に一

生懸命色を教えました。

愛はとても表現力のある子だと思います。気持ちで色を教えるといっても人それぞれ感じ方は違うものです。愛もそのことは十分分かっていると思います。けどなんとか「明に色を伝えたい。」という愛の優しい気持ちを感じられます。

色を二人で言い合って明は、「僕には恋の色が分かる。」といいました。二人の間での色は「色＝感情」だから明は、今の自分の気持ちを色で例えると恋だと思ったんだろうと私は思いました。

この話を通して、人は居場所を無くしたら逃げてもいいんだと思います。誰だって自分に自信を持って生きているわけではありません。だから自分をダメだと思わないで、愛のように自分を必要としてくれる場所が必ずあるから。愛にとって明は大切な存在です。明にとって愛は大切な存在です。今、私のまわりにいてくれる家族や友達を大切にして、私を必要としてくれる人の大切な存在でありたいと思いました。